

日本語アカデミック・ライティングの質的テキスト分析研究の展望 —非母語話者教育の充実を目指して—

孫 守乾

1. はじめに

「聞く・話す・読む・書く」という言語習得の4技能の中で、「書く」は意識的学習により身につく産出面の技能なので、理解面より難易度が高いと言われている (Lee2006:399; 恵谷 2011:99)。また、論理的な文章を書く能力は大学での勉学において求められているものである。二通 (1996) は大学教員を対象にしたアンケート調査において、多くの教員がレポートの書き方をはじめとする基礎的な文章作成の訓練の必要性を指摘していると述べている。さらに、石黒 (2014) は、文章作成の訓練は独習が難しく、教室で教師の指導のもと学んだほうが効果的であると指摘している。

本稿は、非母語話者 (留学生と JFL 環境の日本語専攻の大学生) 及び母語話者 (大学生) の日本語アカデミック・ライティング (以下、AW) 教育の研究を概観して、それを踏まえ先行研究に残された課題及び今後の展望について述べる。

本稿で概観する先行研究は、レポートや論文を対象として考察するものである。そのため、本稿では日本語 AW を、雑誌論文、及び大学というコミュニティで課されるレポートや論文を書くことと定義する¹。

本稿の着眼点は2つある。1つは非母語話者の日本語 AW 教育である。ただし、非母語話者と母語話者の日本語 AW 教育の研究成果は互いに参考になると考えられる (大島 2003:213) ため、母語話者に関する研究も扱う。もう1つは、日本語 AW 教育研究の一部である「質的テキスト分析に関する研究」への考察である²。その2つの着眼点にかかわる研究を以下の3つに分類し論じていきたい。

- 1) 構成・展開について
- 2) 表現について
- 3) 引用について

2. 構成・展開について

本章では構成・展開に関する先行研究を、研究対象が論文かレポートかで分けて紹介していく。論文の構成・展開については学問の分野間の横断的な比較を行った研究もあれば、特定の1分野の研究もある。

分野間の横断的な比較を行った研究として、大島他 (2010) や佐藤他 (2013) が挙げられる。大島他 (2010) は、人文科学・社会科学・工学各 90 編の雑誌論文を対象に、「導入部分」に出現する典型的な構成要素を分析した。典型的な構成要素とは、a)

¹ 意見文や論述文をアカデミック・ライティングとして考察する研究 (脇田・三谷 2011; 長谷・堤 2011 など) もあるが、本稿では対象としない。

² 日本語 AW 教育の意義や役割の研究、及び指導の際に使用するツール (e ラーニングや剽窃判定ソフト等) の効果など指導法に関する研究は、本稿の考察対象から除外する。

研究の対象と背景の説明、b) 先行研究の提示・検討、c) 研究目的・研究行動の提示をはじめとする構成要素である。これらの現れ方を比較し、「導入的要素」の分野間の異同について分析した。その結果、異なる分野の論文の共通点として a→b→c という典型的な展開の型が確認された一方、分野による展開の違いが明らかになった。人文科学系では、日本教育学は導入部分以外の部分に c が繰り返して出現し、文学は導入部分に abc 以外の構成要素も多くあり、より複雑な展開が見られた。社会科学系の中でも、社会学の 8 割以上が分野間の共通点であった「a→b→c」型に「d) 研究方法の説明」を加えた「a→b→c→d」の展開が見られた。工学系は全体的に定型性が高くほとんどが a→b→c であるが、その中でも建築工学は 4 割が a→c (b が次の章に現れる) であった。

佐藤他 (2013) は、人文科学・社会科学・工学各 90 編の雑誌論文を対象に、「a) 研究の対象と背景の説明、b) 先行研究の提示・検討、c) 研究目的・研究行動の提示」などの構成要素³を設定して「考察」の部分进行分析した。その結果、工学は主に「実験・調査型」であるのに対し、人文科学・社会科学は「実験・調査型」(主に日本語教育学)や工学ではほとんどない「資料分析型」など多様な構造型が混在し、研究主題や研究方法に応じて構造型が選定されていることが多いことが分かった。

特定の 1 分野の研究としては、大島 (2009) や大島 (2016) が挙げられる。大島 (2009) は、経営学の事例研究論文と史学の史料研究論文 (各 10 編) の論証部分の構成要素进行分析した。その結果、【取り上げ】⁴、【事実記述】、【引用】、【評価的描写】、【推論・解釈】という構成要素が認められた。つまり、事例・史料に基づく研究の論証部分に、【取り上げ】から【事実記述】【引用】および【評価的描写】【推論・解釈】を経て【位置づけ】に至る型が頻出することが見られたのである。これらの論文の大きな特徴は、ことがらに対する書き手のさまざまな形の評価が研究の中核の一部を形成していたことである。レポート作成指導では評価の表現は主観的になりやすいため避けられがちであるが、実は事例・史料に基づく研究では頻繁に用いられることが見られた。したがって文章指導では評価を適切に述べる訓練を行うべきだとされている。

大島 (2016) は、農業経済・漁業経済分野のデータ複合型⁵論文における統計資料と事例の解釈部分を対象に、構成要素を分類・抽出し、表現の構造と文体的特徴进行分析した。その結果、「資料の提示とそれに対する考察」と「調査結果の提示とその考察」という構成要素が観察された。また、従来の教材に示された定型的表現に加え、いくつかの表現のバリエーションが見られた。その他、研究手法によっては結果の提示と考察をする際に文章の専門性を低くする具体的な文脈化言語および評価表現の使用が

³ 大島他 (2010) と同じ構成要素を使用している。

⁴ 【取り上げ】には、「論の進め方や研究行動の展開に言及するもの」、「ある事柄を取り立てて焦点を当てて注目を促すもの、また順序を設けて事柄から特徴等を取り出すもの」、「その研究に関して問題提起を行うもの」という 3 種類がある (大島 2009:17)。

⁵ 「実験・調査型」と「資料分析型」が複合したものである。

多く観察され、そして解釈の深まりにつれて抽象的な名詞句に置き換えていき、脱文脈化が進むという構造がうかがえた。

一方、レポートの構成・展開に関する研究として、大島 (2010) や内藤・小森 (2016) が挙げられる。大島 (2010) は、日本語母語話者の大学生が書いたレポートの論証部分と社会科学系の論文の論証部分⁶を比較した。その結果、論文との差異及びレポート間の差異は【引用】の適切さと【取り上げ】、【評価の描写】、【推論・解釈】の配置による結束性の強弱に影響されることが分かった。

内藤・小森 (2016) は、14名の学部1年の留学生が書いたレポートの初稿における内容の繰り返しの文章を抽出し、卓立性・結束性・論理性・一貫性の4つの観点⁷から、冗長な重複表現かどうかについての判定をし、また重複と判定されなかった文の特徴について考察を行った。その結果、これらのレポートでは重複を避ける方策として、1) 省略する、指示詞を使用する【卓立性】、2) 省略する、指示代名詞もしくはキーワードで言い換える、階層を意識した接続表現の使い分けをする【結束性】、3) データを読み解き、自身の解釈を記述する【論理性】、4) 前述した内容を要約する、または章・節をまたぐ【一貫性】などが使われていることが分かった。

このように、留学生数の上位3位⁸である人文科学・社会科学・工学では、異なる分野の雑誌論文においても「導入」や「考察」の部分に共通する構成要素が見られた。また、論文の構造型は、分野はもちろん、研究テーマや研究方法によって決まることも多いことが分かった。さらに、初年次のレポートを作成する際には、母語話者の学生にとっても留学生にとっても、構成要素間の結束性を保つことが困難点となることが分かった。

3. 表現について

本章では表現についての先行研究を、1) 接続詞やメタ言語表現⁹を考察したもの、2) モダリティや文末表現を考察したものに分類して紹介していく。

接続詞やメタ言語表現を考察したものとして、村田 (2007)・清水 (2010)・小森 (2020) が挙げられる。村田 (2007) は、7ジャンル (経済学教科書、経済学論文、工学論文、物理学論文、文学論文、新聞社説、文学作品) 計 370 編の文章における指標 65 項目 (接続語句・助詞相当句) の出現率を調査した。その結果、接続語句・助詞相当句 (「

⁶ 大島 (2009) の分析結果をそのまま使用している。

⁷ この4つの観点の関係については、内藤・小森 (2016:5) は排他的ではなく、「卓立性と論理性」「結束性と一貫性」など、重なるものもあったと述べている。

⁸ 2020年に独立行政法人日本学生支援機構が行った調査による。

(<https://www.studyin.japan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2020.html> 2021年4月1日アクセス)

⁹ メタ言語表現の定義については、清水 (2010:3) は「論者が論文の中で、論の進め方や研究行動について言及する表現であり、その目的としては、読み手に論の構成を分かりやすく伝えるもの」と述べている。本稿ではこの定義を援用する。

方、「～うえ(で)」など)の出現率を指標として、文章のジャンルを判別することが可能であることが示された。また、論述的な文脈展開を持つジャンルの文章(経済学入門書、経済学論文、工学論文、物理学論文、文学論文)に共通する語句も抽出された。その結果、接続語句・助詞相当句が文章のジャンル判別の指標となりうる可能性がより一層高くなった。また、以上の4分野の論文と経済入門書における論理展開に重要だと考えられる「並列(・同列)」、「対比(・対立)」、「因果(・呼応)」の表現の使用傾向も明らかになった。

清水(2010)は、政治学などの人文系5分野の雑誌論文におけるメタ言語表現を、「話題内容を表すメタ言語表現」(例:本稿では～を考察する)と「方向づけを表すメタ言語表現」(例:次に～について見てみよう)という2種類に分け、それぞれのメタ言語表現が論文においてどのように使われているかについて考察した。その結果、序論や結論では「話題内容を表すメタ言語表現」がよく使われていた。序論では、これから始まる論について述べるためにル形が、結論では今までの調査を振り返って述べるためにタ形が使われていた。一方、本論では「方向づけを表すメタ言語表現」が多く使われていたことが分かった。

最も新たな研究傾向については、小森(2020)はメタディスコースの観点から論文の内容・構成・表現を統合的に分析している。この研究は、人文科学系の日本語教育学の雑誌論文(実験/調査型)の冒頭章に使用されたメタディスコースに注目し、その表現の出現箇所・使用目的・機能について分析した。分析から分かったメタディスコースの使用傾向は表1の通りである。

表1 冒頭章におけるメタディスコース出現箇所・使用目的・機能¹⁰

段階	メタディスコース	使用目的	機能
段階1 研究の対象/背景の説明	Evidential	段階2に進むための前提/ 根拠提示	議論の土台作り
	Transition (しかし)	読み手を導く	
段階2 問題点/重要点の指摘	Hedge	慎重な論の展開	議論の土台作り
	Attitude marker	重視すべき点の読み手と の共有	
	Transition (そこで)	読み手を導く	段階の移行
段階3 研究目的/研究行動の提示	Frame marker	論文を読み進める指針の 提示	全体像の表示

¹⁰ 表1は小森(2020)の表6(P62)の引用、空欄も出典のままである。

モダリティや文末表現を考察したものとして、村岡 (1999)、酒井・関 (2020)、清水 (2012)、小森 (2014) が挙げられる。村岡 (1999) は、40 編の農学系論文の「材料および方法」という部分で用いられる文型について調査した。その結果、文末の動詞は圧倒的にタ形が多く、特に「行った」、「した」、「用いた」、「求めた」という動詞が、それぞれ特定の文型で頻繁に用いられていることが判明した。「材料および方法」の文章は、実験や調査などの個々の手順を、時系列にそって、淡々と正確かつ平易に説明することが求められることから、「タ形」の頻用は十分根拠あるものと考えられた。さらに、農学系論文の「緒言」の部分の文末では「テイル形」が最も多かったなどの結果との比較から、論文構成の各部分によって、語や文型の出現状況に偏りのあることが実証された。

酒井・関 (2020) は、人文・社会学系分野の学部 1~3 年の日本語母語話者の大学生のレポートのコーパス (332 編) と、国語教育・日本語教育・言語学分野の雑誌論文のコーパス (80 編) をデータとして、文末モダリティ表現の使用傾向を考察した。その結果、学術論文はラレル形を多く用い、客観的な記述と漢語動詞が豊かである一方、レポートはル、タ、テイル形を用いた主観的な記述が多く、漢語動詞の数も種類も少ないことを明らかにした。また、モダリティ重複表現の考察については、レポートには「のではないかと考える (た)」などが定型化し、1 つの定型表現として使用されている問題があることが分かった。

清水 (2012) と小森 (2014) は 1 つの文末表現に焦点を当てて考察を行った。清水 (2012) は、50 編の政治学や文学など人文系 5 分野の雑誌論文 (論証型、検証型、複合型) を対象にノダ文の機能や出現する位置を調査した。その結果、ノダ文は段落の締めくくりを行う機能を持ち、論証型の論文の段落の最終部に出現することが最も多いと分かった。そのノダ文は、直前の助詞「ハ」に率いられる名詞句を主題とする以外に、それ以前 (例えば段落の冒頭) に書かれている表現に助詞「ハ」を伴わせたり、また前文までの内容とつながりを持たせつつ、それまでの内容をまとめている場合もあることが分かった。

小森 (2014) は、社会科学系と人文科学系の雑誌論文から 126 の例文を抽出し、意見を述べる文末表現「(の) ではないか」を考察した。その使用状況は表 2 の通りである。

表2 「(の) ではないか」の使用状況¹¹

出現場所	構造	共起表現	出現形式の傾向	意味・機能
導入部分	背景→ <u>問題提起</u> →論文の目的	マイナスの意味・書き手の評価を表す表現	(の) ではないだろうか	レトリカルな機能
	背景→ <u>自説の提示</u> →論文の目的	手段・仮定・因果関係を表す文型	(の) ではないか +動詞	思考内容の対象化
本論部分	調査結果→主張	逆説・譲歩、総括・妥当性・立場・言い換え・推量、対比・並列・比較選択の副詞・接続表現	(の) ではないか (の) ではないか +動詞	中心的な意味 思考内容の対象化
	調査結果→ <u>考察</u> → <u>帰結</u>	総括・結論の接続表現	(の) ではないだろうか	レトリカルな機能
	調査結果→ <u>データ</u> 解釈→ <u>理由</u>	理由を表す文型		
終結部分	まとめ→ <u>締めくくり</u> →(今後の課題)	書き手の評価・今後の可能性を表す表現	(の) ではないだろうか	レトリカルな機能
本論部分 (他者の意見)	<u>他者の意見</u> →書き手の意見	発話・思考動詞、発言・思考・判断の名詞	(の) ではないか という+名詞 (の) ではないか +動詞	思考内容の対象化

*下線部で「(の) ではないか」を使用する

また、小森 (2014) はこのような表の提示により、非母語話者の「非用」や「同じ表現の重複」など談話レベルの問題を解決できる可能性があるとして述べている。

このように、論文の分野によって接続詞の出現傾向が異なることや、2種類のメタ言語表現の使われ方が序論・本論・結論によって異なることが分かった。また、メタディスコースの観点から冒頭章を分析することで、その構成・展開が可視化されたことや、具体的な文末表現の使用状況を明らかにしたことなど、論文の研究面の蓄積はAW教育においても有用なものと言える。

¹¹ 表2は小森 (2014) の表3 (P54) の引用である。

4. 引用について

本章では引用に関する先行研究を、1) 文法研究の観点から引用の形式を分析したものの、2) 雑誌論文における引用の実態を考察したもの、3) 大学生のレポート・論文における引用の実態を考察したものに分類し紹介していく。

文法研究の観点から引用の形式を分析した研究として、田中 (2018) は、ト引用文、コト埋め込み文、ニヨルト文、ヨウニ文を「情報リソースを示す文型」¹²と定義し、引用者の立場の有無という観点からそれぞれの文型の特徴を分析した。その結果、ト引用文とコト埋め込み文は引用者の立場を含まない。一方、ニヨルト文とヨウニ文は引用者の立場を含むが、前者は文末形式トイウを付加することでその程度を弱く、後者はモによるとりたてを行うことでその程度を強くできるということが分かった。

雑誌論文における引用の実態について、二通 (2009) と山本・二通 (2015) が挙げられる。二通 (2009) は、理系・文系合わせて 20 分野の論文 1 編ずつを対象に、引用の出現する位置と引用の方法について調べた。その結果、文系は理系の論文より引用数が多いことに加え、文系の論文のタイプによる違いも明らかになった。具体的には、理系や文系の実験や調査による検証を目的とした検証型論文は、序論と本論での引用が多く間接引用がほとんどであった。それに対し、文系の文献に基づく論述過程に重点を置く論証型論文は、本論での引用が多く直接引用も多用され、文献あたりの引用回数も多かった。また、論文における間接引用には書き手の評価を含むかどうか、引用表現があるかどうかによって様々な形式があることも確認された。

山本・二通 (2015) は、解釈という概念を使い、引用部と合わせ分析した。この研究は「資料分析型」の人文・社会科学系論文を分析対象として、論文筆者の解釈があるかどうか、あればどのような解釈かという観点から、引用文を「A 中立的引用文」、「B 解釈的引用文」、「C 引用解釈的叙述文」、「D 解釈文」に分け、それぞれの機能や量的特徴を明らかにした。機能については、A は資料の着目点を中立的立場から引用・提示する。B は資料を論文筆者の立場から引用して解釈構造の軌道に乗せる。C は資料との内容的関係性を持たせつつ論文の解釈構造の中で引用叙述する。D は資料には一定の距離を置いて読み手を論文の解釈構造の中に巻き込み、主張・結論へ導く。量的特徴については、A に比べ BC が多く、D は全体の 4 割近くを占めていることが分かった。

大学生のレポート・論文における引用の実態について、母語話者を調査対象とした大島 (2017) 及び、学習者を調査対象とした楊 (2017) と数野 (2018) が挙げられる。大島 (2017) は、40 名の母語話者の大学 1 年生の期末レポートを分析し、主な問題点を以下の 3 つにまとめた。

1. 引用記号の不備。例えば「(馬場 2015) は、～」

¹² ト引用文の代表例：「～は～と述べている」、「～では～と述べられている」。コト埋め込み文の代表例：「～は～ことを指摘している」、「～では～ことが指摘されている」。ニヨルト文の代表例：「～によると/によれば、～」。ヨウに文の代表例：「～が述べているように、～」。

2、「によると+引用動詞」のような文のねじれ。例えば、「によると/よれば・・・と述べている」

3、引用とすべき箇所にマークがなく、剽窃となっている。

また、学生の振り返り記述により、初年次の学生には作文指導の授業を通じて初めて引用のルールを知った人や今までの引用は間違っていたと気づいた人が多いことが分かった。

楊 (2017) は、中国国内の日本語専攻の学部生の卒業論文を対象に調査を行ったところ、以下の6つの問題点や傾向が見られた。

- 1、序論に引用を多く使用するが、全体的に引用密度が低い。
- 2、信頼性の低い引用元や出典が不明の引用元が少なくない。
- 3、直接引用より間接引用を多用している。
- 4、元の論者の姓と出版年を併記した方式などの引用標識を多用し、注・文献番号のみで引用を示すケースが少なく、孫引きも一部で使用している。
- 5、「述べる」という引用動詞を多用しており、引用動詞の過去形の過剰使用が目立つ。
- 6、「引用標識」と「注・文献番号」という2つの引用の表示方法の使用頻度は論文の分野によって異なる。

数野 (2018) は、作文コースの受講者 (13名の留学生) のレポートを分析し、インタビュー調査を実施した。レポート分析の結果、全員は引用の基本は身につけているものの、2名のレポート中の引用の形態、形式、要約、解釈においてさまざまな誤りが見られた。特に引用の範囲の示し方と要約、解釈については、さらなる練習が必要であることが示唆された。インタビュー調査の結果、全員が引用の目的を理解していること、間接引用で書こうという意識を持っていることが明らかになったが、自分の言葉でまとめて間接引用をすることの難しさを全員が感じていることも分かった。

一方、引用の指導に関しては、近藤他 (2016) が15種類のAWの教材における引用の説明の部分調査した。その結果、「引用形態」や「引用形式」の説明に重点がおかれる傾向が見られ、その形態や形式が選択される意味・機能、及び引用の適切性に関わる「必要性」や「データの質」などの7項目について言及されている教材はわずかであった。また、「論文の構成」、「論の展開」、「引用の目的」という文章作成における中核の3要素と切り離された説明や練習が多いことが明らかになった。

中村他 (2019) は、論文執筆に慣れない学生の専門分野の論文をサンプルとして用いる授業を実施し、引用に関する活動を行った。具体的に学生には以下の課題を与えた。

サンプル論文中の、引用していると思われる箇所に下線を引き、その下線部について、1位置(序論、本論、結論のどこにあるか)、2引用箇所の内容説明、3引用の目的、4使えそうな表現、を答える。(P26)

このような活動により、専門分野の論文の書き方、特に引用のしかたを理解させ、論文自体の読みを深める効果があることが分かった。

以上に述べてきたように、引用文は論文筆者の解釈・立場の有無という観点で分類できる。検証型と論証型の雑誌論文は、直接引用と間接引用の使用頻度や文献あたりの引用回数などにおいて違いが見られた。また、母語話者の学生にとっても留学生にとっても、レポートや卒業論文に適切に引用を使うのは難しいことも分かった。さらに、引用の指導については、教材が引用表現の意味・機能などへの説明が足りないなど、様々な問題点が挙げられている。このような現状を受けて、教育現場では学生の専門分野の論文をサンプルとして、引用方法を理解させるといった試みがされている。

5. まとめ及び展望

本稿は日本語 AW 教育研究の一部である、レポートと論文の質的テキスト分析に関する研究を「構成・展開」（計6編）、「表現」（計6編）、「引用」（計8編）に分類し概観した。概観を踏まえた今後の展望としては、以下の6点にまとめられる。

第一に、「構成・展開」については、まず段落内の展開、つまり文と文のつながりに焦点を当てる研究がまだ少ないようである¹³。レポートと論文に対する理解は、章・節のテーマへの理解と段落の具体的な内容への理解に分かれる。章・節は見出しがあるので、そのテーマが分かりやすいのに対して、段落は必ずしも中心文があるわけではないので、文と文の関係性がはっきりしていなければ読みにくい恐れがある（石黒2020）。現状では個人経験などをテーマ¹⁴とした非学術的文章における文と文の関係性を考察した先行研究があるが、文体の差があることから、その研究成果は学術的文章に適用しにくいと考えられる。なお、学生の AW における論の展開や文間のつながりを考察する際に、問題点を指摘したあと、その文の修正例も提示すれば両者を比較できてより説得力があると考えられる。

また、「序論」や「結論」のような論理展開の明快なセッションを対象として考察している研究が多い一方、最も重要である本論について、その構成や論理展開及び表現を考察する研究がまだ少ないのが現状である。「序論」や「結論」に比べ、本論の質的テキスト分析はかなり労力や時間がかかるが、その分研究結果は AW 教育にもたらす価値が大きいのではないかと考えられる。

第二に、「表現」については、文中に現れた接続表現やメタ言語表現を考察対象から除外した先行研究が少なからず存在している¹⁵。文中の接続表現やメタ言語表現は論理展開に寄与し、文頭のものと同様に重要であると考えられる。

第三に、「引用」については、間接引用に引用する側の解釈が含まれる場合、引用と

¹³ 例えば、内藤・小森（2016）では文と文のつながりを「結束性」と呼び、その観点から重複した文を考察している。

¹⁴ 例えば、「印象深い出来事」や「最近読んだ本の紹介」などのテーマである。

¹⁵ 例えば、接続表現を研究した村岡他（2004）やメタ言語表現を研究した清水（2010）である。

解釈の区分及び剽窃の判断基準は定まっていない。第二章で取り上げた先行研究では、間接引用文には引用のほかに解釈や考察の内容も含まれていることが分かった¹⁶。ここでは、数野 (2018:65) の例 3 を挙げる (原文そのまま)。例 3 は学生の書いた引用文であり、その後ろの記述は例 3 への考察である。

例 3: 賀が述べているように、中国語力の低下が長期的かつ普遍的なものになれば、母国語である中国語自体が退化する恐れがある (人民網 2010)。

人民網 (2010) で紹介されている賀の見解に賛成して自分自身の意見を述べる場合、「人民網 (2010) において賀が述べているように、...恐れがある。」などとしないと、「恐れがある」というのが自分の意見であるということが不明瞭である。

つまり、「ように」を用いる間接引用文には、「恐れがある」という引用する側の意見が含まれているわけである。

引用する際に、特に注意しなければならないのは引用と解釈の区分である。区別をつけないまま記述すると、読み手を混乱させる可能性があり、ひいては剽窃問題も起こしかねない。直接引用は引用符「」があるのに対し、一部の間接引用はそれほど明確な引用標識がないので、引用と解釈を区分できるように工夫する必要がある。しかし、現状では英語圏も含まれ間接引用についての効果的指導法は見出されていない (中村他 2019:27; 吉村 2015:150) ため、引用と解釈の区分及び剽窃基準をめぐる意見が学生と指導教員で分かれていることもある (山本 2016:123; 菅谷 2017:59)。ここでは山本 (2016:123) の例 5 を挙げる (原文そのまま)。例 5 は学生の書いた引用文であり、その後ろの記述は例 3 への考察である。

例 5 (C3) : 使役受身形が日本語のヴォイスの中でどのような位置を占めてきたかをまとめてみると、その扱いは次の三つに分けられる。(前田 1989)
1 ~省略~, 2 ~省略~, 3 ~省略~

例 5 も同様である。「まとめてみる」という意志行為、「分けられる」という可能行為の主体は、その文末に示されている引用論文の著者、前田である。しかし、下線部のモダリティ表現では、この論文の書き手である C3 の意志・可能行為を示すものになってしまう。

以上に示した例 5 は、引用形式を適切に用いている。一見、正しく引用しているようである。しかし、これらもやはり剽窃であり、まさかこれが「剽窃」に当たると思ってもみなかった学生には、まさに青天の霹靂とも言うべき事態である。

¹⁶ 田中 (2018)、山本・二通 (2015)、数野 (2018)。

しかし例5はすでに出典を明記しているので、出典を示さない剽窃とは本質的に違うのではないかと考えられ、剽窃の判断基準をさらに検討する余地があるだろう。

以上の引用と解釈の区分という問題に加え、出典表記のある間接引用の場合、原文を自分の言葉で言い換える程度と引用の適切さ、あるいは剽窃との関連性も更に検討されるべきだと考えられる。英語圏では出典表記があっても原文に酷似した表現の使用は「表現の盗用 (plagiarising language)」と呼ばれている (Pennycook1996)。一方、日本では菅谷 (2017) の調査結果が示したように、その言い換えの程度と剽窃の関係に関しては、学生と教職員の間、さらに教職員間でも見解に大きな違いが見られる¹⁷。

学生の間接引用の習得状況については、吉村 (2015) は、「このような言い換えには研究分野の内容についての深い理解に加え高い言語力が必要とされ、多くの大学学部生や第二言語学習者にとって能力の範囲を超えた課題となっている」と指摘している。また Pennycook (1996:223) では、ある学生は自分の言葉で言い換えると原文とのズレ (mistake) が生じやすく、それに比べ原文をそのまま書くほうがより有力 (powerful) であると述べている。このような習得状況を把握した上で、どの程度の言い換えが必要であるかについての基準を明確に示し指導することが今後の課題となるのだろう。

第四に、1) 日本語母語話者の学生と2) 非母語話者の学生が書いたレポートや論文の差異を比較した研究はまだ少ないようである。本稿の第二、三、四章でレビューを行った先行研究では、母語話者の雑誌論文との差異を比較した研究は1) について2編¹⁸、2) については1編¹⁹存在するが、両者の差異に焦点を当てた研究はなかった。両者の共通点に関しては、構成要素間の結束性を保つこと、及び適切に引用を使うことは、母語話者の学生にとっても非母語話者の学生にとっても困難であることが示唆された。このように、両者には共通の困難点や問題点があるものの、表現などにおいてどのような相違点があるかについてははまだ明らかにされていない。一方、論文より主観的な主張が多用される意見文をデータとして、日本語母語話者と非母語話者の使用したモダリティ表現の差異を比較した研究はある。例えば伊集院・高橋 (2010) では、日本語母語話者と中国語母語話者が日本語の同一課題作文で用いた文末のモダリティの特徴を分析した結果、前者には「と考える」などの「書き手の内的思考を表す」モダリティが、後者には「しよう」などの「読み手に働きかける」モダリティが多用されるという傾向が見られた。

第五に、データの整合性が求められる。例えば、大島 (2010) では、学生のレポートの問題点を明らかにするため、「海・食・環境」というテーマのレポートと社会学という異なる分野の論文を比較した。また、楊 (2017) は、JFL 環境の日本語専攻生の卒業論文における引用の実態を明らかにすることを目的としているが、分析対象は論

¹⁷ 例えば、出典表記はあるが、原文をほぼコピーする間接引用に対し、「剽窃」、「たぶん剽窃」「たぶん剽窃ではない」、「剽窃ではない」と判定した教職員はそれぞれ約30%、30%近く、15%、30%近くであった。

¹⁸ 第二章の大島 (2010) と第三章の酒井・関 (2020) である。

¹⁹ 第四章の楊 (2017) である。

文の初稿ではなく、すでに指導教員などによる添削がなされ、合格と判定された最終版である。このようなデータは研究結果の精度に影響している可能性が高いので、よりふさわしいデータを収集する取組みが望まれる。

第六に、他の学問分野の論文に対する質的研究を行う研究者は、その分野の専門家と連携する必要がある²⁰。量的研究、例えば他の分野の論文に使用される接続詞の出現頻度と種類を考察する場合、特に論述の具体的な内容を深く読まずに統計などの研究手法で完成できる。しかし、論述展開や表現に関する質的研究を行う場合、論文の具体的な内容への理解は避けては通れない。学術的文章は基本的に読みにくく、その上に研究者自身の専門と異なる分野の文章ならばさらに読みにくい可能性が高い。そこで、当該分野の専門家と連携することで、論文の細部まで踏み込み分析をより精緻なものにでき、研究成果の質に役立つと考えられる。

以上の研究面に関する5点のほか、AWの指導面においては、質的テキスト分析に関する研究の成果に基づき、学生の専門に即した指導が期待される。論文の構成・展開は専門分野によって異なっていることが明らかになっている（大島他 2010; 佐藤他 2013）。一方、論文作成の授業では、異なる専攻の学生が混在している現状がある（中村他 2019:26）。また、JFL 環境、例えば中国の大学の日本語専攻学生向けの卒業論文作成の授業では、一口に文系と言っても、その中に社会学・文学・日本語言語学・日本語教育学など異なる分野の卒業論文を執筆する学生がいる。分野を問わない典型的な論文の構成・展開の提示だけでは、論文執筆経験のない学生の大まかな論文スキーマの形成には役立つが、それぞれの分野の論文を執筆する段階に入ると有効であるか否かは疑問に思われる。

対策については、現時点の論文作成の授業では同じ専攻の学生を対象に実施するのは難しいかもしれないが、専攻分野の論文をサンプルとして活用する（佐藤 2009; 中村他 2019）と同時に、第2章で紹介した各分野の論文の構成・展開についての研究成果をいかすのは有効だと考えられる。

今後、上述した観点からレポートや論文の質的テキスト分析に関する研究が行われることにより、非母語話者の日本語 AW 教育研究に知見を積み重ね、教育現場の問題解決に資する研究成果の創出が期待される。

参考文献

石黒圭 (2014) 『日本語教師のための実践・作文指導』くろしお出版

石黒圭 (2020) 『一目で分かる文章術』ぱる出版

伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ—日本・中国・韓国語母語話者の比較—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(36)、pp.13-27.

²⁰ 例えば、人文科学や工学の論文構成を研究した佐藤他 (2013) では、日本語教育学の研究者の他に、工学の研究者も執筆者である。

- 惠谷容子 (2011) 「文脈化」にもとづく中・上級文型学習の枠組み試案『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』(3)、pp.99-107.
- 大島弥生 (2003) 「日本語アカデミック・ライティング教育の可能性—日本語非母語・母語話者双方に資するものを目指して—」『言語文化と日本語教育.増刊特集号,第二言語習得・教育の研究最前線』、pp.198-224.
- 大島弥生 (2009) 「社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析」『専門日本語教育研究』11(0)、pp.15-22.
- 大島弥生 (2010) 「大学初年次のレポートにおける論証の談話分析」『言語文化と日本語教育』(39)、pp.84-93.
- 大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子 (2010) 「学術論文の導入部分における展開の型の分野横断的比較研究」『専門日本語教育研究』(12)、pp.27-34.
- 大島弥生 (2016) 「データ複合型論文における統計資料および事例の解釈部分の構造と表現—農業経済/漁業経済分野の論文を例に—」『専門日本語教育研究』(18)、pp.43-49.
- 大島弥生 (2017) 「引用を学ぶ基礎の段階の大学生の文章に見られる諸問題」『専門日本語教育学会研究討論会誌』(19)、pp. 24-25.
- 数野恵理 (2018) 「留学生のレポートに見られる不適切な引用と学生の意識—レポート分析とインタビュー調査から—」『日本語・日本語教育』(2)、pp.57-72.
- 近藤裕子・中村かおり・向井留実子 (2016) 「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題—教材分析を通して—」『日本語教育方法研究会誌』23 (1)、pp.8-9.
- 小森万里 (2014) 「アカデミック・ライティングにおける「(の) ではないか」の使われ方に関する一考察」『日本語・日本文化』(41)、pp.37-60.
- 小森万里 (2020) 「人文科学系学術論文の冒頭章におけるメタディスコース—内容・構成面と言語面とのつながりを意識したライティング教育に向けて—」『日本語・日本文化』(47)、pp.49-65.
- 酒井晴香・関玲 (2020) 「文末モダリティ表現に焦点を当てた大学生レポートの問題—コーパスを用いた実態調査より—」『国語科教育』88 (0)、pp.21-29.
- 佐藤勢紀子 (2009) 「サンプル論文で学ぶ論文作成の技法—「研究のための日本語スキル」授業報告—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』(1)、pp.37-47.
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子 (2013) 「学術論文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に—」『日本語教育』154 (0)、pp.85-99.
- 清水まさ子 (2010) 「論文におけるメタ言語表現について—メタ言語表現と論の展開とのかかわり—」、『NEAR conference proceedings working papers』、pp.2-15.
- 清水まさ子 (2012) 「学術論文でノダ文はどのように用いられているのか」『日本語/日本語教育研究』(3) web 版、pp.73-89.
- 菅谷奈津恵 (2017) 「大学教員と学生を対象とした盗用判断課題—予備的調査—」『日本語教育方法研究会誌』23 (2)、pp.58-59.

- 田中佑 (2018) 「情報リソースを示す文型について—アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現に関する検討—」『文藝言語研究』(73)、pp.135-149.
- 内藤真理子・小森万里 (2016) 「アカデミック・ライティングにおける重複がもたらす冗長性を回避するための方策—卓立性・結束性・論理性・一貫性の観点からの分析—」『日本語教育』164 (0)、pp.1-16.
- 中村かおり・向井留実子・近藤裕子 (2019) 「専門分野に即した引用方法の理解を促す活動の試み」『日本語教育方法研究会誌』25 (2)、pp.26-27.
- 長谷川哲子・堤良一 (2011) 「アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か?—意見文の分析を通じた一考察—」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』(11)、pp.21-34.
- 二通信子 (1996) 「レポート指導に関するアンケート調査の報告」『学園論集』(86・87)、pp. 63-78.
- 二通信子 (2009) 「論文の引用に関する基礎的調査と引用モデルの試案」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』(1)、pp.65-74.
- 村岡貴子 (1999) 「農学系日本語論文の「材料および方法」で用いられる文末表現と文型」『専門日本語教育研究』(1)、pp.16-23.
- 村岡貴子・米田由喜代・大谷晋也・後藤一章・深尾百合子・因京子 (2004) 「農学・工学系日本語論文の「緒言」における接続表現と論理展開」『専門日本語教育研究』(6)、pp.41-48.
- 村田年 (2007) 「専門日本語教育における論述文指導のための接続語句・助詞相当句の研究」『統計数理』55 (2)、pp.269-284.
- 山本富美子・二通信子 (2015) 「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」『日本語教育』(160)、pp.94-109.
- 山本富美子 (2016) 「論文の「意図的ではない剽窃」の問題—モダリティの混同と解釈のない引用—」『Global communication』(6)、pp.117-132
- 楊秀娥 (2017) 「日本語学習者の引用使用の実態調査—中国国内における日本語専攻課程の学部生の卒業論文を対象に—」『専門日本語教育研究』19 (0)、pp.57-62.
- 吉村富美子 (2015) 「盗用を避けることの難しさと指導」『第二言語としての日本語の習得研究』(18)、pp.150-164.
- 脇田里子・三谷閑子 (2011) 「「文章表現」と「口頭表現」の連携—超級日本語学習者を対象にした試み—」『同志社大学日本語・日本文化研究』(9)、pp.59-79
- Lee 凧子 (2006) 「留学生の書く日本語意見文の分析—日本人学生との比較において—」『立命館法学』別冊 ことばとそのひろがり (4)、pp.399-412.
- Pennycook, A. (1996) .Borrowing Others' Words : Text, Ownership, Memory, and Plagiarism. *TESOL Quarterly*, 30, pp.201-230.

(そん しゅけん・東京都立大学大学院博士後期課程)